



丹下健三「広島平和

化

文

コンサートマスターとして大忙しだったオペラシーズンが終わり、今、私は素晴らしい経験を一つ一つ、記憶にとどめようとしている。

オケ全体をまとめる私は2008年5月、ウィーン国立歌劇場管弦楽団のオーデイションに合格し、当初からコンサートマスターとして入団した。コンサートマスターとは、オーケストラ全体を統率する役目の第1

ムの保存を前提に完成したと誰もが思うだろう。しかし、順序は逆なのだ。コンペ時点ではドームの存在は未定で、市の保存決定は17年後の66年のことだった。丹下は、敗戦(1955年、広島市)

バイオリン首席奏者のことだ。試用期間を経て、今年3月に正式に就任した。女性はコンサートミストレスと呼ばれる。歌劇場の専属オーケストラであるウィーン国立歌劇場管弦楽団と、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団との関係はやや複雑だ。歌劇場管弦楽団の精鋭部隊がウィーン・フィルという図式なのだ。日本ではニューイヤークンサートでウィンナワルツを弾く姿が有名だろう。だがウィーン・フィルの奏者は日常的には歌劇場管弦楽団の構成メンバーとしてオペラを演奏しているのである。一般に、歌

劇場管弦楽団に在籍して2年以上の奏者がウィーン・フィルに入る。新参者の私も来年ようやくウィーン・フィルハーモニー協会に入会する。でもコンサートマスターとして歌劇場管弦楽団に採用

された私は、既にウィーン・フィルのコンサートマスターも何度も務めた。昨年9月の日本公演にも同行した。長く男性ばかりだったウィーン・フィルで私は史上初の女性コンサートマスターと

戦だと思った。2度目の挑戦で採用されたのは07年12月だ。その時には全員が不合格だった。2度目の挑戦で採用されたのが、日本でも有名なコンサートマスター、ウエルナー・ヒンクさんの引退を受けての公募だった。私はブルガリアのソフィア生まれ。父はバイオ

立場だった01年、雑誌でウィーン・フィルのコンサートマスターとなり、01年に歌劇場の来日公演で初来日。03・04年にはロンドン・フィルハーモニー管弦楽団でもコンサートマスターを務めた。

ラ」だった。刺激的で気分が良かった。同歌劇場の音楽監督、小澤征爾さんともチャイコフスキーのオペラ「エフゲニー・オネーギン」などで一緒にした。とてもコミュニケーションの取りやすい素敵な方だ。ウィーン・フィルは特定のシェフ(首席指揮者)を置かないのも特徴で、リッカルド・ムーティ、ニコラウス・アーノンクールの世界の一流指揮者と仕事が出来た。すべての時間が貴重だった。ウィーン・フィルに女性が入り始めたのは2000年ごろからだ。今はバイオリン、ハープ、ピアノ、チェロのパートに

合わせて7人いる。私たちが女性がオーケストラの伝統の音を変えてしまうのだろうか? それは分からないが、私が入る前から変化が起きるとすれば、様々な要素が絡みあつてのことだろう。長く男性ばかりだったため、劇場にきちんとした女性奏者用の楽屋がない。そんなささいな不自由はあるけれど、今の待遇には満足している。ウィーン・フィルの今秋の日本公演には私は同行しない方向だが、来年はまた日本の皆さんとお会いできるだろう。(ウィーン国立歌劇場管弦楽団コンサートミストレス)

ウィーン・フィルに新風

◇女性初のコンサートマスター就任◇

アルベナ・ダナイロヴァ



いわれている。伝統と格式、独特の響きを持つウィーン・フィルには同じ教師の下で学んだ奏者が多い。だが私には全く知人がいなかった。純粋に、世界一のオーケストラで仕事が出来て入団した。女性が長くないなかつた団体ゆえの面倒や困難はあるが、失敗しても、価値ある挑

リニスト、母はピアノとトダ。地元の子供向け音楽学校でバイオリンを習い、ドイツのロストック音楽大学とハンブルク音楽大学で学んだ。学位を取り、大学院生のような

演奏中は音で対話しようとしていくつかのオーケストラを経験したが、ウィーン・フィルは特別だ。演奏中、仲間が何をしたいかすぐ分かる。音による対話が成り立つのだ。一流奏者ぞろいである証左だが、似た教育を受けた者が多く、伝統を受け継いでいるのだろう。そんな名手たちとオペラも交響曲も演奏できる醍醐味がある。

ウィーン国立歌劇場で初めてコンサートマスターを務めたのは08年9月17日。ウエルディのオペラ「シモン・ボッカネグ

1947年(昭和22)年12月31日、元職業軍人だった父が30歳の剣に生きた大切さを気付かせてくれた。どこでも骨を埋める場所はあるという意味だ。中学3年の秋、「高校へ進学してもいいか」と私が尋ねると、母は「いや」と言った。

抄遊交

山有り一という江戸時代の僧、月性の漢詩が、ケンカ少年の私に、社会の広さとともに、毎日を真剣に生きる大切さを気付かせてくれた。どこでも骨を埋める場所はあるという意味だ。中学3年の秋、「高校へ進学してもいいか」と私が尋ねると、母は「いや」と言った。

た漢詩 二 宏